

私的言語の存在

- ウィトゲンシュタインの私的言語論を手掛かりに -

柳澤 由佳

私には、「あなたには私のこの悲しみがわかるの」といった風に、他者には原理的に理解できない私的な感覚が存在するように思える。そして、それならば私的な感覚を表す私的な言語も同様に存在するのではないか、と考えた。そこで、私的な感覚や私的な言語に関して調べていくと、オーストリアの哲学者であるウィトゲンシュタインの存在に辿り着いた。彼は私的な感覚は不必要なものとして言語ゲームからは抜け落ちていくと主張しているが、私には私的な感覚は言語ゲームに伴っていると考えた方がメリットがあるように思われる。そこで、まずは彼の提唱した言語ゲームや私的言語についての研究を調べ、数多くなされているウィトゲンシュタイン研究の代表的なものを参考にしながら考察することで私的な感覚や私的な言語の存在に関するの解明につなげたいと考えた。

まずは、私的言語について論じる上で必要となるウィトゲンシュタインの議論をまとめ、その上で、数多くいる中でも代表的なウィトゲンシュタイン研究者であり、ウィトゲンシュタインの私的言語批判に特に関心を寄せている五名の先行研究を参考にすることで、「私的言語」についてどのような議論が行われてきたのかについて示した。また、ウィトゲンシュタインの「私的言語批判」に賛同する形で多くの私的言語論が展開されている中、新たに私的言語を肯定しようとする議論が行われている。そこで、まずは、永井・谷口らの私的言語肯定論が有効なものであることを明らかにした。その上で、私的言語肯定論の先行研究を参考にしつつ、私的なものである「クオリア」は言語ゲームに伴うと考えた方が言語ゲームについてうまく説明できることを示した。具体的には、自身にとって言語ゲームがクオリアを伴っているものと考えた時のメリットと、クオリアを伴っていることで他人を言語ゲームに参加させることが可能になることを明らかにした。次に、クオリアが言語ゲームに伴うことによって「語の意味」はどのように考えられるかについて考察し、私的言語が存在するとしても、公共言語はなくなり、むしろ二つの言語は重なり合い互いになくしてはならないものとして関わり合っている可能性を提示した。私は本論文を通して、クオリアが言語ゲームに伴っていると考えることで私的言語の存在を擁護し、公共言語と共存すると考える方がメリットがあることを明らかにしたのである。

(指導教員 横山幹子)